


**PRESS RELEASE**

岡山大学記者クラブ、文部科学記者会、科学記者会 御中

令和 5 年 6 月 2 8 日

岡 山 大 学

**抗がん剤腹腔内投与が進行卵巣がんの予後を改善**
**◆発表のポイント**

- ・ 抗がん剤を腹腔内に投与することで卵巣がんの予後を改善することが判明。
- ・ 今後の保険適用に向けて準備中。

岡山大学学術研究院医歯薬学域（医）の長尾昌二教授と国際医療福祉大学の藤原恵一教授を中心とするグループにより進行卵巣がんに対する抗がん剤の腹腔内投与の有効性を確認するために行われた国際共同試験 iPocc（アイポック）試験の結果が総合医学雑誌「*New England Journal of Medicine Evidence*」に掲載されました。

今回の研究では、カルボプラチンという抗がん剤を腹腔内投与することで、卵巣がんの再発のリスクが 17% 減少することが明らかになりました。また、抗がん剤の腹腔内投与によって引き起こされる懸念のあった腹痛や腹腔内感染のリスクは、10% 程度であることもわかりました。

現時点では、健康保険を使つての治療は受けられませんが、保険適用に向けて準備を急いでいます。すでに保険適用されている抗がん剤「PARP（パープ）阻害薬」と組み合わせることで、根治は難しいとされてきた進行卵巣がんの治療の可能性が飛躍的に高まることが期待されます。

**◆研究者からのひとこと**

2005 年頃から藤原恵一先生（現 埼玉医科大学国際医療センター 客員教授、国際医療福祉大学特任教授）と進めてきた研究がついに結実しました。この新しい知見が患者さんのもとに届けられるように引き続き頑張りたいと思います。



長尾教授

**■発表内容**
**<現状>**

卵巣がんは発症早期からお腹の中全体に広範囲にがんが広がった状態、播種（はしゅ）を引き起こします。そのため、手術で取り除くことが難しく、非常に治りにくいがんの一つとされています。1990 年頃から卵巣がんの播種を治す目的でお腹の中に直接抗がん剤を投与する方法（腹腔内化学療法）が試みられてきました。しかし、使用されている薬が時代遅れになったことや腹痛や感染などのトラブルが多いことなどから広く用いられることはありませんでした。

2000 年代に比較的副作用が少なく、刺激の少ないカルボプラチンという抗がん剤が腹腔内化学療法に適していること、また、お腹の中に大きな塊がある進行した状態の患者さんにも効く可能性



## PRESS RELEASE

があることなどが分かり、この臨床試験で真の有効性を確認することになりました。

### <研究成果の内容>

この試験では、進行卵巣がんの標準治療の一つである dose dense（ドーズデンス）TC 療法（パクリタキセルという抗がん剤を毎週、カルボプラチンという抗がん剤を3週ごとに点滴で静脈内に投与します）を受けた患者さんと dose dense TC 療法のカルボプラチンを静脈内ではなく腹腔内に投与した患者さんを比較しました。その結果、腹腔内投与によって再発のリスクが17%下がることがわかりました。また、その効果はお腹の中に大きな塊がある状態であっても認められました。

### <社会的な意義>

婦人科がんの中でも根治の非常に難しい卵巣がんの予後抗がん剤の腹腔内投与が改善することが明らかになりました。現状では抗がん剤の腹腔内投与は保険診療で認められていないため、研究以外では実施できません。今後、保険診療として認められれば、広く患者さんに適用できるようになります。すでに保険適用されている PARP（パープ）阻害薬と組み合わせることで、根治は難しいとされてきた進行卵巣がんの治癒の可能性が飛躍的に高まることが期待されます。

### ■論文情報

論文名：Intraperitoneal Carboplatin for Ovarian Cancer – A Phase 2/3 trial -

掲載紙：New England of Medicine Evidence

著者：Shoji Nagao, Keiichi Fujiwara, Kouji Yamamoto, Hiroshi Tanabe, Aikou Okamoto, Kazuhiro Takehara, Motoaki Saito, Hiroyuki Fujiwara, David S.P. Tan, Satoshi Yamaguchi, Sosuke Adachi, Akira Kikuchi, Takeshi Hirasawa, Takeshi Yokoi, Tomonori Nagai, Toyomi Sato, Shoji Kamiura, Akira Fujishita, Wong Wai Loong, Karen Chan, Peter Syks, Alexsander Olawaye, Sang-Young Ryu, Hiroyuki Shigeta, Eiji Kondo, Yoshihito Yokoyama, Takashi Matsumoto, Kosei Hasegawa, Takayuki Enomoto

D O I : 10.1056/EVIDoa2200225

U R L : <https://evidence.nejm.org/doi/full/10.1056/EVIDoa2200225>

### ■研究資金

本研究は、AMED の支援を受けて実施しました。

#### <お問い合わせ>

岡山大学学術研究院医歯薬学域（医）周産期医療学講座  
教授（特任） 長尾 昌二  
（電話番号）086-235-7320 （FAX）086-225-9570

